

### 32. 精薄者施設入所者の齲蝕罹患状況

— 3 施設の比較 —

松本弘幸<sup>1)</sup> 畑山佳之<sup>1)</sup> 伊藤寿郎<sup>1)</sup>  
 関口五郎<sup>2)</sup> 高村 剛<sup>2)</sup> 本間 敦<sup>1)</sup>  
 松浦光洋<sup>1)</sup> 村井明彦<sup>1)</sup> 長尾美則<sup>1)</sup>  
 前川あやめ<sup>1)</sup> 前川祐貴子<sup>1)</sup> 石塚永遠児<sup>1)</sup>  
 福田直美<sup>1)</sup> 石井郁美<sup>2)</sup> 道谷弘之<sup>2)3)</sup>  
 武藤寿孝<sup>3)</sup> 金澤正昭<sup>3)</sup>

(本学歯科医療問題研究会<sup>1)</sup> 本学社会歯科臨床研究所附属緑星の里歯科診療所<sup>2)</sup> 口腔外科 I <sup>3)</sup>)

精神薄弱者の齲蝕に関する疫学的研究は従来より行われ、多くの報告がみられるが、精薄者の齲蝕罹患率は、正常者に比して高い、低い、差がないなど、その結果は報告により様々である。一方、精薄者では、自己の口腔衛生管理が充分できない、施設での口腔衛生指導や管理が充分でない、歯科治療が困難な場合が多くまた機会も不足しているなどの問題点があることは周知の通りである。したがって、口腔衛生指導・管理や歯科治療の状況は、施設により差があるものと思われ、それによって入所者の齲蝕罹患状況が異なることも考えられる。

そこで今回われわれは、精薄者施設3か所の入所者の齲蝕罹患状況を調査し、比較を試みたので、若干の考察を加えてその概要を報告した。

〔対象および方法〕施設Rの収容者98名(15～61歳、平均年齢31.1歳)、施設Fの収容者46名(17～60歳、平均年齢41.5歳)、および施設Kの収容者47名(15～22歳、平均年

齢18.5歳)の智歯および過剰歯を除く永久歯を対象とし、DMF指数を指標として用いた。それぞれDT, MT, FT, DMFTを年齢層毎に昭和62年厚生省歯科疾患実態調査の値(以下厚生省実調値と略す)と比較するとともに、各施設間での比較を行った。

〔結果〕施設RおよびFでは、厚生省実調値よりDTおよびMTが大きく、FTが小さい傾向を示したが、DMFTでは大きな差は認められなかった。施設KではDT, MT, FT, DMFT全てにおいて厚生省実調値との差は認められなかった。

〔考察〕施設RおよびFでは未処置齲蝕歯が多く、治療する場合でも修復処置より抜歯が行われる場合の多いことが示唆されたが、施設Kでは正常者と差はなかった。また、何れの施設でも齲蝕経験歯数では正常者との差はなく、必ずしも精薄者の齲蝕罹患率は高くないことが示唆された。

### 33. 中学生の歯周疾患に関するCPITNによる疫学的研究

— 集団口腔清掃指導による4年間の推移 —

河合 治, 藤井健男, 加藤義弘  
 横田光弘, 加藤幸紀, 今宮彩子  
 小鷲悠典 (歯科保存 I)

〈目的〉 WHOの提唱したCPITNは、歯周疾患の実態と歯周治療の必要性を短時間に把握できる有用性の高い指標である。そこで今回我々は、中学生の歯周疾患の実態をCPITN, M-GI, M-P1I(以下GI, P1I)により診査し、同時に集団口腔清掃指導を実施してその効果の経年的な推移を検討したので報告する。

〈調査対象〉 瀬棚郡今町の中学校の生徒を対象にした。対象人数は延べ1521人で調査は87年から90年までの4年間で年1度行った。

〈調査方法〉 Tooth no 17,16,11,26,27,37,36,31,46,

47を対象に、CPITN(WHO), GI, P1Iを測定した。GI, P1Iはそれぞれ、Løe&Silness, Silness&Løeの方法を近心頬側面に適用した。集団口腔清掃指導は、口腔内を染色液で染め出し、各自でプラーク染色部位をチャートに記入し確認させ、ブラッシング赤染部位を完全に落とすように指導した。

〈結果〉 1) CPITNコード: 87～90年まではコード0は全体の40%, コード1は20%で維持されたが90年はコード0が20%, コード1が50%とその比率に変化が見られた。コード3は7%, 6%, 2%, 3%と年次減少